

リュブリャーナ大学文学部

アジア・アフリカ研究学科日本研究講座

機関報告

2011年11月30日現在
(文責 守時なぎさ)

1. 機関概要

名称：リュブリャーナ大学 文学部 アジア・アフリカ研究学科 日本研究講座
Japonologija, Oddelek za azijske in afriške študije, Filozofska fakulteta, Univerza v Ljubljani
住所：Aškerčeva 2, 1000 Ljubljana, Slovenia
電話番号：+386 (0) 1 241 1446, +386 (0) 1 241 1308, +386 (0) 1 241 1450
ファクス：+386 (0) 1 425 9337
ホームページ：http://www.uni-aas.si/

2. 沿革

- 1995年 アジア・アフリカ研究学科日本研究講座開設。東北福祉大学との交流開始。
筑波大学からの日本語教育実習生を学科として受け入れ開始。
- 1997年 第10回日本語教育連絡会議主催。筑波大学と学部間交流協定締結。
- 1999年 群馬大学と学部間交流協定締結。
- 2000年 清子内親王スロベニアおよび大学訪問。
日本女子大学からの日本語教育実習生受け入れ開始。
- 2001年 日本政府文化無償援助により、PC室、視聴覚教室設置。
- 2002年 筑波大学との学部間交流協定をもとに大学間交流協定締結。
- 2003年 第16回日本語教育連絡会議主催。
- 2005年 学科創立10周年記念シンポジウム開催。
日本女子大学と大学間交流協定締結。
- 2006年 第19回日本語教育連絡会議主催。東京工業大学と交流協定締結。
- 2008年 東京外国語大学と交流協定締結。宮崎大学へ日本研究講座から初の留学生。2008年
国内大学連携大学生訪日研修（国際交流基金）へ参加開始。
海外日本語教育実習生派遣プログラム（国際交流基金）で実習生の受け入れ開始。
群馬大学と大学間交流協定締結。
- 2009年 大使館主催日本語スピーチコンテストに協力開始。
- 2009年 2009/10年度から新カリキュラム開始（3および8を参照されたい）。
- 2011年 国際交流基金JFにほんごネットワーク（さくらネットワーク）のメンバーになる。

2014年EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）国際大会がリュブリャーナで開催されることが決定。

3. 学科概要

近年の一番大きな変革は、ボローニャ・システムに基づく大学改革による新しいカリキュラムが2009年秋から導入されたことである。これにより、日本研究講座は従来の学部4年から学部3年＋修士2年のプログラムになり、これまでのダブルメジャーのみのプログラムから、日本研究だけを専攻とするシングルメジャーのプログラムも併設されることになった。2011年11月現在、学部3年全てを新しいプログラムの学生が占め、修士課程は、現3年生が卒業して進学する2012/13年度から開設される予定である。

学科から日本への留学生は、年に約10名弱。近年奨学金の削減と円高によって、留学の希望者は多いものの、実際に留学する留学生は減少の傾向にある。また当学科を卒業し日本の大学院へ在籍の者が3名。エラスムスなどで当学科に留学する学生は、ヴィリニウス大学（リトアニア）、コメニウス大学（スロバキア）から毎年2～3名いるが、残念ながら当学科からこれらの大学へ留学する例はまだない。

なお、日本研究講座を取り巻く状況にも変化が起こっている。2003/04年度から開設されていた韓国語の選択科目が、2009/10年度から東アジア研究コースの一科目としても履修が可能になった。また韓国研究のスタッフも1名から2名に増えた。機関外では、スロベニアの第二の都市にあるマリボル大学で2008/09年から一般公開講座が始まったが、2010/11年度をもって現在閉講されている。

4. 日本研究教員と研究分野（2011/12年度）

Andrej BEKEŠ	現代日本語学、コーパス日本語学（現在20%在職。筑波大学教授兼任）
Boštjan BERTALANIČ	政治学
Nina GOLOB	日本語音声学（2012年2月産休から復帰）
Irena SRDANOVIĆ	コーパス日本語学
Nataša VISOČNIK	文化人類学
寒川フメリヤク クリスティーナ	現代日本語学、学習者のための辞書研究
川島 尚宗	考古学
重盛 千香子	日本語学、対照言語学
守時 なぎさ	現代日本語学、異文化間教育

【研究休暇中・育児休暇中の教員】

Luka CULIBERG	社会言語学
一宮 由布子	日本語学、言語政策
デラコルダ川島 ティンカ	宗教社会学
柳玟淑（Hyeonsook RYU）	図書館情報学

5. 学生数

5-1. 在籍学生数 (2011/12年度) (S=シングルメジャー、D=ダブルメジャー)

学年	日本研究専攻 1年	日本研究専攻 2年	日本研究専攻 3年	日本研究専攻 4年生以上
人数	75名 S 47名, D 28名	35名 S 24名, D 35名	22名 S 14名, D 8名	38名 Dのみ

5-2. 語学コースに通う学生数 (2011/12年度)

コース	文学部学生対象 日本語1	文学部学生対象 日本語2	文学部学生対象 日本語3
人数	東アジア研究 (必須) 11名 他専攻 (選択) 18名	東アジア研究 (必須) 5名	東アジア研究 (必須) 5名 他専攻 (選択) 1名

コース	一般成人対象 日本語1	一般成人対象 日本語2
人数	2012年2月から開始 参加者数未定	3名

6. カリキュラム

1年次	2年次	3年次	旧カリキュラム 4年次
日本語 I、表記、異文化研究方法論 I、東アジア史 I、選択科目	日本語 II、日本史概論 I、日本語文法概論 I、選択科目	日本語 III、日本社会論 I、日本文学概論、卒論ゼミ、選択科目	異文化研究方法論 II、翻訳概論 II、東アジア宗教論、東アジア文化史、コンピュータ言語処理論、選択科目

7. 卒業後の進路

卒業後は、上にも述べたように日本の大学へ進学する他、日本研究に関係した就職先には、日本大使館・スロベニア大使館、日系企業、日本と取引のある企業、旅行会社がある。また通訳・翻訳を行っている卒業生も数名いる。さらに、学科の創立から15年以上経ち、博士課程を修了した卒業生が学科に戻って教鞭を取って後輩の指導に当たっている。

8. 現在の問題

ボローニャ・システムに伴うカリキュラム改変に伴い、授業や進級の上で混乱があるのはもちろんであるが、そのような制度以外の面における学科の現問題を以下に三点挙げる。

(1) 日本語教育専門家の不足、教員の不足

元卒業生が日本語以外にもおのおのの専門分野で学業を修め、学科に戻って来ているのは非常に頼もしいことであり、これは学科が発展していく上で必要不可欠である。しかし相対的に日本語教育を専門として学業を修めてきた教員、特に日本人教員の比率が減ってきた。一方、新カリキュラムでは日本語を重視したシラバスが設定されており、また日本語教育を取り巻く事情の変化によってこれまでよりも多様な背景を持つ日本語教育実習生が数多く送られてくるようになった。つまり、学生の日本語指導の教員が不足していること、および日本語教育実習生を指導する専門教員が不足していることが、学生の日本語力の低下や実習生の指導不足につながる懸念される。

また新しいカリキュラムになり、実際に教える時間数が増えたこと、また 2012/13 年度から大学院の開設が見込まれているにも関わらず、日本研究の教員数は増えていない。この問題に対しては、当面の所 2012/13 年度の入学定員をこれまでの 50 名から 30 名に減らすことで対処することになっているが、抜本的な改革にはなっていない。

(2) 日本への留学の時機

旧プログラムでは学部 4 年制でダブルメジャー制を取っていたため、留年・休学に現在のような制約が厳しくなく、まず日本語の基礎力をしっかりと確立してから日本へ留学することができた。しかし新プログラムでは学部が 3 年制になり、留年や休学に大きな制限が設けられることになったため、早い学生では学部 2 年が終了した時点で留学するケースも考えられる。スロベニアでは中等教育機関における日本語教育が皆無に等しく、ほとんどの学生が大学入学とともに日本語の学習を始める。このような状況では、2~3 年間の内に日本で専門教育の授業を受講できるだけの日本語力を獲得できる学生はごく一部である。これは日本語の基礎力という面から見ると留学には大いに不利である。また日本研究の観点から見ても、学生自身の研究方針や内容が固まっていないうちに日本への留学を遂行することになり、時期尚早と言わざるを得ない。せっかく日本へ留学できる機会を得ても、日本語学習だけのために日本に留学するのは高等教育機関の留学としては不十分である。

(3) 「学士」の評価

これまで学部 4 年が終了した学生に与えられていた「学士」は、日本の学士号にほぼ相当していたが、新しいカリキュラムの「学士」の評価はまだ不確定である。なぜなら、学部が 3 年制になり、卒業論文として課される課題も飛躍的に簡易なものになったからである。このため社会的には、新しい「学士」の評価がこれまでの「学士」の評価より低いと見なされることになるかもしれない。

この「学士」評価の見直しによる影響は、スロベニアもしくはEUの中だけに留まらない。日本へ留学する学生が、学部生として留学するか、それとも大学院生として留学するかという問題が出てくることが予測される。留年・休学に制約があり、学部を 3 年で卒業する学生が、日本の大学院で研究者の卵として日本研究の道を歩んでいけるだけの力があるかどうか、不安である。